

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会

事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

博物館の来館者が減っている！ —お客さんに満足してもらえる客引きをやろう—

どうしたらよいのだろうか。博物館の入館者が減少しているのだ。

博物館は展示施設であり、その限りにおいて、誰かに見ていただくことを前提としているのであるから、このことで悩むのは当然の話なのだが、近年はことが深刻化している。このことは博物館に働くものは程度の差はあれ、誰もが「体感」していることではないだろうか。

もっとも入場者数が問題視されたのは今に始まったことではない。これまでも博物館を廻るさまざまな場面で、来館者数が幾度となく話題となってきたことはある。しかし近年ほどその数字が魔力を持ち始めたときはない。設置主体が博物館に「体罰」を加え始めたのだ！

●数字で示すことについてひとこと

どれだけの市民が利用したか。たしかに数字で示すことは一目瞭然でわかりやすい。客観性もある。しかし、そこに問題はないのだろうか。

たしかに、数字による評価は、比較を可能にする。そこに競争原理を持ち込み、他者との比較あるいは自己比較が可能となる。しかし、問題はその先だ。競争原理によって勝者と敗者を決め、敗者を退場させるというのは文化施設の場合、いかなるものであろうか？数字が望ましくない負の要素を示した場合、それを敗者を決定し、退場を命ずる手段とするのではなく、そういう数字となって現れた原因を探り、マイナス要因を挽回するための手だてを考えるためのきっかけとすべきなのではないだろうか。もちろん、運営主体が博物館とともに、理由を考えるのである。

ほんとうに不必要であると自他共に認めた施設ならともかく、すくなくとも必要性が認められているものについては、数字をもって敗者の烙印を押してはならないのではないか。

●どうして博物館ビジターは減少したのか

たった一人でもよい、ほんとうに見たい人が来てくれたなら、それは博物館として幸せなことな

のだ。30年程前にこのような話を聞き感動した。しかし、いまはその時代ではないようだ。美しかったその時代は残念ながら終わったというほうが正確かもしれない。

それでは、なぜ人が来なくなったのか。

博物館がその展示を縮小したとか展示場を閉鎖した、あるいはサービスを縮小したという話を聞かない。むしろ、各館から送られてくるポスター、行事案内をみると、それぞれの博物館は以前にも増してさまざまな工夫をおこなっているように思う。如何せん、そのスピードがお客さんのニーズに追いつかないのかもしれない。

こういうと失礼だが、お客さんは贅沢におなりになった。まず、選択肢の増加、多様化があげられる。いまの日本、利用できる休暇は限られているにもかかわらず、楽しめる空間が多すぎるのだ。もはやショッピングセンターも一日中過ごせる楽しい空間と化した。札幌ドームは、生のプロ野球が毎週のように楽しめる空間だ。おまけに人気者新庄までやってきたとあれば、勝ち目はない。わたしも見にいった。しかも、そうした土日祝日利用施設は、どこも設置主体から脅かされ、ハッパをかけられて、限られたパイを奪い合っている。ある人びとは、それを望ましい競争、自由競争というかもしれないが、それにも限度がある。入場者を増やすことが博物館の目的ではないからだ。

小学生の利用も少なくなった。授業時間の減少に加えて、見学旅行などを組むための費用も減額になったと聞く。しかし、それ以上に、基本的に出生率の低下により小学生人口が減少傾向にある以上、しかたがないではないか。北海道の人口にしても増加はしていない。地球規模で見た場合、人口の増加がよいことかどうか意見はあるだろう。いまそのことには触れない。ただいえることは、行政もマスコミも、正月の新聞や特集番組から右肩上がりの景気のよいグラフばかりを描き、「明るい未来像」を印象づけ、道（国）民をだまし続けてきた。ここにも問題がある。どうして正直に言わないのか、もっと人口は、利用者は減少すると！

しかし設置主体がおこなう評価に反対したり来

館者減少の言い訳ばかり考えてもいけない。博物館もお客様に来ていただきたいのだ！

●ここで博物館に働く我々も自問してみよう。

そもそも我々は、他の館園を頻繁に利用しあっているだろうか？もし、博物館学芸員がお互いの博物館を利用していないとすれば、それはなぜか、その理由を冷静に考えてみる必要があるだろう。忙しさ、時間のなさは、いまの社会に生きる人びとにとって同じ条件だろう。もし、足を運ばせるだけの魅（魔）力に欠けている、と感じたならばこれは問題だ。博物館学芸員にとっておもしろくないものは、一般の人びとにとっては、なおさらおもしろくない可能性が高いからだ。そもそも自分たちが行きたくないものを人に勧める姿勢に「？」がつく。

●それでは、どうすればよいのだろうか？

これがわかれば教えて欲しい！もちろん一時しのぎでなく、お客様に永続的に利用していただくための方法だ。

ありがたいことに博物館ファンは存在する。だまっけても来てくださる方だ。そうした方々は、博物館の楽しみ方、利用の仕方を知っている方々だとおもう。しかも、（あえて失礼を顧みず言わせてもらえば、）毎年、確実に再生産されている。

もちろん、大切にしなければならない人びとである。

そのうえで、新しい層を開拓することがこれまで以上に必要とされているのではないだろうか。客引き、その言い方が悪ければ呼び込みをやること。ただし、夜の町とちがうところは、来ていただいたからには、それだけのものを提供することである。ポッタクリは厳禁。なんらかの満足を得て館を出ていただかなくてはならない。博物館なんてと思っていたが、なかなかじゃん！これから旅行先では博物館と名の付くところも選択肢に入れるようにしよう。こう思っただけのよう、博物館関係者が団結して共同で「呼び込み」をおこなってはどうか。

もちろん、このことは利用者から見れば迷惑な話だろう。かぎられた時間を博物館見学に使うのだから。そこで、博物館も、どこかが変わらなければならない。たとえば、常設展示。これを替えるのは予算もかかるし、準備も大変、すぐにはできない。とすればどうするか！展示の見た目は同じであっても、学芸員がおこなう解説や講座など、別のサービスで楽しんでいただくことが求められてくることになるだろう。

（北海道開拓記念館 サービス広報課長 出利葉浩司）

指定管理者制度の導入状況

ここ数年来、話題となっている指定管理者制度の全国的な状況をお知らせします。データは日本博物館協会が昨年6月時点において加盟各館を対象におこない集計したものです。対象となる館は当然公立の施設です。概要は別表のとおりです。回収率は68%です。

具体的にみていくと、導入方向にあるのは138館で、回答館に占める率(以下同)は29%、これに対して非導入は23%、不明等は49%となります。導入施設の内訳は県立35%、指定都市50%、市区立24%、町村立12%となります。

現状は導入の状況をみているところからやや導入傾向にある段階かと思えます。そして設立単位の大きな施設が導入傾向にあるといえます。このことは規模が大きければ経費も大きく、スケール

メリットが生かせるからかとも思われます。したがって規模が小さくなるほど、受け皿を探すことが難しくなるともいえるのではないのでしょうか。

また制度導入にあたり民間活力の助力をさかんにアピールしていますが、導入済みの112館のうち民間事業者やNPOが受け手となっているのはわずかに6館で、97館が自治体等の出資法人か公共団体であると回答していることから、たてまえとはかなり違うのではないのでしょうか。

さらに導入前後の予算と職員数をみると、予算が増加した館が25館、逆に減少したのが56館、かわらずが1館、職員数が増加した館が11館、減少した館が34館、かわらずが48館となっています。これらのことから導入することにより予算を削減する傾向にあることがわかります。また職員数も同様であるともいえますが、人の数を減らすことは予算よりも難しいともいえるのではないのでしょうか。 （北海道博物館協会 事務局 笹木義友）

設置者	依頼館	回答館	導入			非導入	不明等
			済み	途上	予定		
県立	172	136	43	2	2	27	62
指定都市	65	46	22	1	0	6	17
市・区立	380	264	46	10	8	66	134
町村立	92	33	1	1	2	9	20
合計	709	479	112	14	12	108	233



試写会と博物館探検が 残したもの

本年3月3日土曜日の夕方、映画「ナイトミュージアム」の試写会と夜の博物館探検が北海道大学総合博物館で行なわれた。ニューヨーク自然史博物館を舞台にした話題作、真夜中を過ぎるとティラノサウルスの骨格標本や猿の剥製、ディオラマの人物など展示物が動き出すというこの映画を、ご覧になった本誌読者も多いかもしれない。当館では映画配給会社からその試写と博物館見学の対応を求められ、教員会議で検討した結果、応じることを決めた。

博物館を多くの方に知っていただくため、そして運営努力の一環として、演劇や音楽会、ファッション・ショーなどのイベントに場所を提供する館が国内でも近年現れるようになった。当館ではこれまで、シンポジウムやセミナーなどの他に、2004年に台風で倒れたキャンパスのボブラから作られたチェンバロの演奏会、館外にあるミュージアム・デッキでの学生達の音楽会など、展示以外の教育普及活動も実施してきた。そこではいつも、単に場所を提供するだけでなく、博物館活動といかに関連づけるか、参加者をいかに博物館に誘

なうかというスタンスを意識してきた。今回の企画も、映画の内容も当然のことながら、当館が主体となって試写後の博物館見学に対応し得ることから意義あるものと判断し、応じることとなった。

展示解説は、本学の学生を含む当館のボランティアに呼びかけ、それぞれの得意分野である化石、植物、昆虫、本学の歴史、博物館活動の裏側を伝える展示室の解説を担っていただいた。当日の時間配分など課題は残ったが、ボランティアが各自で用意したツールを使って参加親子100名に解説する様子は、全体で1時間半という短時間の見学の間に、参加者に一つでも心に残るものを持ち帰っていただきたいという熱意がストレートに伝わるものであった。参加者の半数以上が当館への来館経験がなかったが、再訪を約束して帰る方々も多数見受けられた。

当館では現在、ボランティアによる展示解説を充実させることが課題の一つとなっている。今回の取組により、ボランティアの持つ可能性を再確認したと同時に、来館してくださる方々に「常に」応えられる体制を整えることが当館の大きな課題であることを痛感した。

(北海道大学総合博物館 助教授 湯浅万紀子)



市立函館博物館五稜郭分館 が閉館します。

市立函館博物館五稜郭分館は、平成19年11月30日(金)をもって閉館する予定です。(平成20年3月31日廃止)

現在、五稜郭公園内では、平成22年の開館に向けて箱館奉行所復元工事が進められており、分館の位置に、箱館奉行所の付属施設である板庫や土蔵が復元されることによるものです。

分館の閉館をむかえるにあたり、分館最後の展覧会となる平成19年度の特展、「さらば五稜郭の星」を、2部構成の超ロングランで開催いたします。

第1部は、「血戦！ 戊辰戦争－東北・蝦夷地の戦い－」と題して、7月14日(土)～9月17日(月)の日程で行います。戊辰戦争最後の戦いとして、五稜郭を舞台に繰り広げられた箱館戦争を中心に、東北各地で行われた数々の戦いの様子も詳しく取り上げ、戊辰戦争の全容に迫ります。さらに、新選組に関する資料やその分身である新徴組の資料なども合わせて紹介していきます。

第2部は、「さよならこれが五稜郭分館だ！」

と題して、10月2日(火)～11月30日(金)の日程で行います。周知のとおり分館は、昭和29年に開催された北洋博覧会の観光館を再利用して、翌年の6月に開館し、既に半世紀が過ぎました。現在の分館における展示は、幕末から明治期の五稜郭跡や箱館戦争、箱館奉行所を中心に紹介していますが、開館当初は、自然資料を数多く展示し、昆虫採集や天体観測の講座を行っていました。2階に〈科学教室〉という部屋があったり、分館の前に〈虫塚〉があったりするのも、その名残りです。

これまで分館に収蔵されたまま未公開だった多くの資料を展示しながら、分館が誕生するきっかけとなった北洋博覧会や五稜郭の堀で行われていた採氷事業など、五稜郭にまつわるトピック的な資料を交えながら、時代の流れの中での分館の移り変わりを紹介するものです。

一部の資料は、今後復元される箱館奉行所に引き継がれますが、多くは、平成20年度から装いも新たに本館での公開になります。五稜郭内での特別展は、これが最後となりますので、お見逃しなく！

(市立函館博物館 学芸係長 佐藤理夫)



思い出の立体手形づくり

化石を展示している博物館にかぎらず、「レプリカ」を展示・収蔵している館は多いことと思います。展示をみていて「レプリカ（複製）」と表示されていると「なんだ、ニセモノか」と思う来館者も多いことでしょう。似たものや同じ種類のものがあるても、「本物」は世の中にひとつしかありませんし、本物のもつ質感や迫力は「レプリカ」からは感じ取れないかもしれません。しかしながら、精巧なレプリカは、より多くの人々に本物をイメージしてもらうため、またひとつの標本を多くの方が比較検討できるように作製されます。

この時期、当館では化石レプリカ作成の手法を応用して、子育て支援センターや幼稚園・保育所の子どもの「思い出の立体手形づくり」の出前講座を行っています。

型取り剤のなかに手をいれて型をとり、石膏を流し込んで、二時間ほどで完成です。型取り剤をはがすと小さな石膏の手が現れ、あちこちで「かわいい!」「すごい!」と歓声があがります。

まさに「本物」はひとつしかありませんが、その

成長段階のワンステージを保存できるというのも、レプリカの真骨頂です。

もちろん、手のレプリカをつくる作業だけでなく、中川町で発見されたテリジノサウルスのツメ化石の本物とレプリカなどを持参し、「なぜレプリカが必要なのか」の解説や化石クイズなどをして、化石研究を身近に感じてもらっています。

成長の記録としての「手のレプリカ」。みんなが大人になった時に「自分」や「家族」、そして「ふるさと」を思い出し、見つめ直す「タイムマシン」として機能する、世界でひとつしかない「レプリカ」となっていることを願っています。

(中川町エコミュージアムセンター 足田吉識)



立体手形作りの様子；枠内は完成した立体手形



『胆振・日高の博物館MAP』が完成

日胆地区博物館等連絡協議会では、このほど『胆振・日高の博物館MAP』を作成した。これは、平成17年9月に白老町で開催された北海道博物館協会ミュージアム・マネジメント研修会のテーマであった「博物館来館者増対策～人はなぜ博物館に来ないのか～」以来の当協議会での懸案事項のひとつでもあり、「何とか平成18年度中に作成を」ということが役員会でも確認されていたことであった。しかしながら、現実的には予算的なことや掲載内容等について種々の問題もあったことから、協議会内部に編集委員会（白老町：武永、むかわ町：櫻井、日高町：小野、新ひだか町：藪中、平取町：森岡）を立ち上げ、そこでMAPの原案作成、費用の検討をすることで進められた。

編集委員会では、もっとも安価な製作方法として原稿を全てデータで作成し、印刷のみを外注することが確認された。そこで表面には地図情報に日胆地区36館の位置と名称のみ掲載し、裏面に館のお勧め写真1枚とともに所在地、電話番号、開館時間、休館日等を掲載することで決定。費用については幸い関係機関の支援も得られたことから、

A4判両面カラー刷りで12万5千枚を製作することができた。

完成したMAPは関係機関への配布はもちろんだが、当初から「来館者増対策」のためのMAPとして位置づけていたため、観光シーズン到来前に協議会メンバーの協力のもと、旅行会社や公共交通機関、道の駅、レンタカー会社、主要な観光施設等へ事前に備えて頂くこともどうにか間に合った。

こうした効果がどの程度「来館者増」として現れるか実際にはこの一年を通して経過観察、事後評価していくことが重要であろう。また、今後は館園職員に留まらず、官民一体となった取り組みも必要になってくるだろう。いずれにせよ、ようやく一歩前進である。今回の経緯と結果が無駄ではなかったことを願いたい。

(沙流川歴史館 森岡健治)



胆振・日高の博物館MAP



企画展2題

例年、12月から2月にかけては博物館へ足を向けてくれる方々が最も少なくなる時期です。この時期に、年度当初には予定されていなかった企画展を続けて開催しました。

一つは、はじめて釧路で石炭が採掘されてから150年迎えることを紹介する「石炭採掘150年展」。たまたま、このテーマで記事の掲載を考えていた新聞社の方と思感が一致したこともあり、企画の段階から協同作業で取りかかることになった、これまでにない取り組みでした。

互いが持つ資料や情報を共有していきながら、釧路炭田における石炭採掘の流れを展示と記事でそれぞれ紹介しました。また、取材から記事の作成、印刷、実際の新聞という流れも1つのコーナーを作って紹介。印刷の工程で使われる「刷版」やフィルムが社外で実物が紹介されることは稀だそうで、新聞社内でも話題になったとのこと。新聞記事の効果で、会場にはかつて炭鉱関係に携わったと思われる方々が、各炭鉱を示した地図をじっくりと眺めている姿も目立ちました。

引き続き開催したのがレコードジャケット展。

放送局から譲り受けた大量のレコードを紹介すること、堅いイメージのある博物館のやわらかい企画を紹介する目的でした。今回はバレンタインデイにあやかり、タイトルに愛、恋、ラブが入った曲を集めました。名付けて「博物館に愛に恋」。

多分に、担当した私の好みを選曲に反映(笑)されていたとは思いますが、実にさまざまな「愛」があるのに気づかされました。残念ながら、音という味付けが実現できなかったこともあり、インパクトはいま一つだったと反省しています。

常設展示が容易に更新できない現状では、市民の間で話題になっているテーマや話題にしてほしいテーマを企画にして随時、開催していく必要性を強く感じたできごとでした。

(釧路市立博物館 戸田恭司)



石炭採掘150年展の会場



企画展「ハチ」

美幌博物館では、3月18日(日)から5月20日(日)まで企画展「ハチ」を開催しております。

本展はわたしたちの身近にみえる昆虫でありながら(あるがゆえに?)「こわい!」という印象だけが持たれがちで、ともすれば敬遠されるハチについて、そのくらしを写真や標本を用いて紹介しています。

スズメバチコーナーは「ハチのくらし」「いろいろなハチの巣」「スズメバチとのつきあい」の3つに分かれています。ハチのくらしのコーナーでは「これなーんだ」「んん?なんの音?」「オスバチはどれ?」といったクイズ形式も取り入れながら、女王バチや働きバチの仕事ぶりを紹介しています。巣の標本を展示しているコーナーでは、ハチの種類による巣材の違いや巣の形の違いを紹介しているほかに「そーっとのぞいてみよう」「とびらをあけてみて」など参加形式の展示もあり、子どもたちも楽しめる内容にしています。また、ハチはなぜ刺すのか、どうつきあえば刺されて痛い目にあう可能性を低くできるのかを知る「スズ

メバチとのつきあい」コーナーもつくりハチに対する理解を深めていただきたいと思います。一方、マルハナバチコーナーでは花との関わりについての紹介に加え、昨年美幌町内でも生息が確認されたセイヨウオオマルハナバチについてその問題点や分布情報などの紹介も行なっています。

展示をとおしてハチたちの魅力的な一面を知り、上手なつきあい方を知り、ハチに対して恐怖や嫌悪だけではない感情を持っていただけたらと思っています。そして、観覧してくれた方がたが日々のくらしのなかでハチを含めた身近な自然への親しみをよりいっそう感じていただければとてもうれしく思います。

(美幌博物館 学芸員 山鹿百合子)



巣から出るコガタスズメバチ



動物達の死について

去る1月28日11時32分、当園のアジアゾウの「花子」は職員が見守るなか息を引き取り、天国へ旅立ちました。28日早朝、職員総出で横臥していた花子を起き上がらせようとしたのですが、時間の経過とともに衰弱が進み推定体重4トンの体を起き上がらせることはできませんでした。翌日の解剖でも特定の疾患は見当たらず、死因は老衰によるものと思われます。

花子は、開園3年目に推定7歳で来園しました。当時、長野県で開催中の世界動物博覧会々場から6日間列車に揺られ動物園にやって来ました。たちまち動物園の人気者となり、約半世紀にわたって多くの市民、多くの来園者を楽しませ喜ばせ、まさに円山動物園のシンボルとして、多くのエピソードを残し、この世を去りました。花子の死後も、たくさんの弔電、メール、お手紙、献花、供物が次々と動物園に寄せられ、花子の存在の大きさを実感させられました。

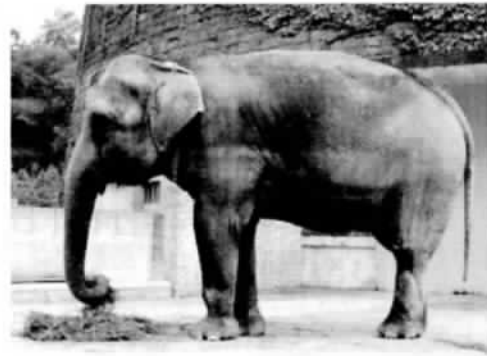
花子の亡骸は、骨格標本として動物園に保存展示しますので、一周忌にはこれまでとは異なる姿でお目見えすることでしょう。

これからは、「ゾウのいない動物園」になりますが、多くの動物達が花子の分もガンバって、これまで以上に楽しい動物園を目指します。

動物園では、年間に飼育展示動物の10%程度の生き死に遭遇するといわれていますが、特に死んでこの世を去る動物達には、これまで園内で元気な姿を来園者に見せて楽しませてくれたことに感謝してやみません。

このような出会いと別れこそが命の大切さを説く絶好の機会と捉え、かつ、動物園の役割と認識し、当園では積極的に動物達の生死を公表しております。これからも生命の尊さを訴え続けていきたいと思ひます。

(札幌市円山動物園 金澤信治)



故アジアゾウ「花子」



情報・話題・動き

平成19年度学芸職員部会

19年度学芸職員研修会の開催日および開催地が決まりましたので、お知らせします。

開催日：9月27日（木）～28日（金）

開催地：胆振管内白老町（会場は未定）

テーマについては開催地ならびに包括する地域を含めたなかで、内容を調整しています。開催のご案内は7月中旬ごろを予定しております。今年には役員改選に当たります。改選により硬直化が見え始めている現状を避けたいと考えております。

テン類調査への協力依頼

北海道におけるテン類の分布について、標本および生息情報提供の協力依頼がありました。調査依頼からだいぶ日数が経過しておりますが、それぞれの館園のご協力をお願いします。

1. テン類毛色変異の遺伝解析：ニホンテンとクロテンは個体間、地域間で大きな毛色の変異を示すことが知られています。道内から広く標本情報を得て、遺伝解析を進めます。

2. 道南西部におけるニホンテン分布拡大の経過調査：移入され野生化したニホンテンは石狩低地帯から南西部のほぼ全域に分布。どのように分布を拡げてきたのかは不明です。データの明確な道南西部の標本情報を求めています。

3. 石狩低地帯より南西側および東北側のテン類の生息状況調査：石狩低地帯～南西部にはクロテンが残存している可能性があります。逆に東北側ではニホンテン分布拡大の懸念があります。石狩低地帯より南西部全地域、東北側の夕張山地・日高山脈西部・増毛山地南部での写真や死体などの生息情報を求めています。情報提供の内容や手段につきましては、森林総合研究所北海道支所の平川浩文さん（hiroh@affrc.go.jp）までお問い合わせください。

会員活動状況

会員の福岡イト子さんは、小樽市内小学校教諭と北海道教育大学旭川校助教たちと「アイヌ語教育」プロジェクトチームを発足、実践にむけて「基礎アイヌ語」テキストを作成中です。若い世代の人たちと土地に根付いた活動を展開中です。

(小川原脩記念美術館 館長 矢吹俊男)



科学館指定管理者として

【1】NPO申請 室蘭市青少年科学館は昭和38年にオープン。入館者数は昭和50年の年間12万人をピークにここ10年間は3万人台を低迷していた。平成15年、科学館民間委託へ…という新聞報道を目にし、退職理科教員を募って、任意団体として応札。室蘭市は我々の提案する自主事業や指導系の能力には大いに期待できると判断する一方、資金力や複式簿記等の会計経理能力にはかなりの不安を持っていたようである。任意団体として落札後、『室蘭市から指定管理者に選定 (H17.11~223) された』ということを実績にNPO設立手続き。2ヶ月ほどで『特定非営利活動法人科学とものづくり教育研究会かもけん』の認可が下りた。

【2】管理運営方針 既存の科学館は『ボタンを押すとガラスの向こうで何かが動く』という展示が多い。当館もそのような展示が全てであり、しかも非常に古い。室蘭市の財政状態から更新も不可能。かくして『見て触れて作って納得科学館』というキャッチフレーズのもとブース構成を考えるとこととなった。ビー玉2万個を用意した『ビー

玉積みブース』が一番人気である。正方形や三角形の枠がついた様々な大きさの底板にビー玉を積み重ねていくと大小さまざまな三角錐や四角錐が現れるという単純なものである。3歳児からおじいちゃんおばあちゃんまで夢中にさせる魅力があるとは、製作時には想像していなかった事例である。平日に行われるファミリーサイエンスや土曜日曜祭日のスポットサイエンスでは、家庭でもできるような簡単な実験や工作を提供している。子どもたちと『もの』との間に『プロモ』が入ることにより、科学館という限られた時間空間の中で、より良くその発達段階にふさわしい『おもしろさ』を提供できると考えている。『子どもの心に科学の火を灯す：プロモーション』から語感に優れた『プロモさん』と呼ぶこととした。当館の人気の秘密は偏に『プロモ活動』にかかっていると言っても過言ではない。子どもたちの発達段階にふさわしい対応をとれるのも教員退職者の強みであり、市民の科学館に寄せる支援の輪も広がりを見せている。1周年記念イベントには市内30社余の協賛を頂くことが出来た。『市民がつくる科学館』の実現に一步近づけたと自負している。

(室蘭市青少年科学館 館長 小川征一)



第15回北海道美術館学芸員研究協議会報告

3月1日・2日の2日間にわたり、北海道立近代美術館映像室において第15回北海道美術館学芸員研究協議会が開催されました。全道の美術館・博物館学芸員及び博物館学、美術史研究者からなる60人の会員に、今年はさらに5名の新会員が加わり、これから設立が予定されている美術館学芸員などのオブザーバー7名が参加しました。笹野尚明会長からのあいさつにはじまり、総会のあと、前回協議承認を得ていた事業である、北海道美術史年表への取組の具体的な方法を、札幌芸術の森美術館の樋泉学芸員が報告。ウィキ（Wiki=ウェブブラウザを利用してwebサーバ上のテキスト文書を書き換えるシステムの一つ）を利用した会員による北海道美術史の決定版の編纂を提案しました。プロジェクト・チームを編成し、基本的ルールを構築してデータ入力をすすめる計画です。

続く研究協議は、テーマを「美術館と地域社会—夕張市美術館を考える」と題して、3月末日の閉館が予定されている夕張市美術館長上木氏に講話をいただきました。美術館の事業・運営が縮小されていく昨今の経済状況にあっては、閉館という問題はど

の館にとっても他人事ではなく、あらためて美術館活動の意義を考えさせられる、普遍性のある問題です。同市の観光施設と併せて夕張市美術館の運営も加森観光が受託とのニュースが聞こえた矢先のことでしたが、当日の時点ではまだ決定事項ではなく、上木館長の思い出話を交えながらも、いかんともしがたい現状の報告に、私たちに何ができ得るのか、などかみ締めるような質疑が続きました。二日目は、夕張の問題を振り返るように、廃坑をフロッタージュによって擦りとり、〈ユウバリ・マトリックス〉を90年代に制作した美術家、岡部昌生氏による「夕張にふれて」と題した講話を聞きました。その場の記憶と時間を紙にとどめる岡部氏の仕事は、すぐさま夕張の培ってきた文化、歴史を思い起こさせ、想いはやはり美術館閉館問題に立ち返らざるを得ません。続いて芸術の森美術館のiPodを利用した音声・映像ガイドの活用事例の報告や、関口雄揮記念美術館、伊達市噴火湾文化研究所からの活動報告がありましたが、活動のアイデアや、新しい館の活動の話は、北海道の文化活動の希望の灯のように感じられた参加者は少なくないでしょう。いかなる状況になろうと、美術館や博物館の本質的な機能を見失うことがなければ、文化がすたれることはないと思います。

(北海道立近代美術館 主任学芸員 久米淳之)

館・園の主な展覧会と普及事業

(2007年4月～7月)

石狩

- 札幌芸術の森美術館 (011-591-0090)
 3/24～5/27 「ディズニー・アート展」
 6/ 9～8/ 5 「モディリアアーニと妻ジャンヌの物語」
 北海道開拓記念館 (011-898-0456)
 4/14・5/12・6/9 体験講座「古文書に親しむ①
 春の陣」
 4/22 フォーラム「北方文化論—河野広道が見た
 北方世界—」
 4/27～6/17 テーマ展「暮らしのなかのストーブ」
 5/27 講演会「朝鮮近現代、在日朝鮮人に関する
 歴史研究と史料収集について」
 7/20～10/8 特別展「鯨」

後志

- 西村計雄記念美術館 (0135-71-2525)
 ～7/9 「画業を辿る展覧会 みあげてごらん」
 ～7/9 「おやこで楽しむ展覧会SHAPES
 かたちのおはなし」
 7/12～10/21 「夏から秋の展覧会
 西村計雄の名山紀行」
 7/12～8/19 「しりべしミュージアムロード共同展」

空知

- 砂川市郷土資料室 (0125-52-2339)
 5/11～6/24 特別展「サンモク展」
 滝川市美術自然史館 (0125-23-0502)
 3/31～5/13 「な・に・コ・レ はくぶつかんて何?
 どんなコレクションがあるの?」
 6/ 2～7/ 1 「[Blue] それぞれの青」
 6/30 化石採集
 富良野市博物館 (0167-42-2407)
 5/19～6/24 特別展「小野州一絵画展」
 5/13・6/17・8/12・10/14 自然観察会「富良野の自然
 に親しむ集い」
 三笠市立博物館 (01267-6-7545)
 7/14～10/14 「化石を見つけよう」

上川

- 名寄市北国博物館 (01654-3-2575)
 5/19～5/31 企画展「エンレイソウ展」
 6/16～7/ 8 巡回展「松浦武四郎と天塩川」
 7/21～8/26 特別展「ヒゲマ」

胆振

- 苫小牧市博物館 (0144-35-2550)
 4/28～6/ 3 企画展「博物館所蔵優品展」
 7/21～9/ 2 特別展「マッチ・ワンダーランド～
 歴史・デザイン・喫茶店文化～」

日高

- 沙流川歴史館 (01457-2-4085)
 4/24～6/3 企画展「お金の歴史[明治～昭和編]」

網走

- 北海道立北方民族博物館 (0152-45-3888)
 4/28～6/26 企画展「カナディアンロッキーと
 大平原のくに」
 7/14～10/8 特別展「世界で一番ダイナミックな海」
 11/23～1/28 所蔵品展「コレクション・ギャラリー 前期」
 2/ 3～3/31 所蔵品展「コレクション・ギャラリー 後期」

事務局日誌

(平成18年11月～平成19年3月)

平成18年(2006)

- 11/ 7 「平成18年度北海道博物館協会加盟官園等
 現況」作成について(依頼)
 11/ 7 個人会員(松尾隆氏)の退会
 11/21 山の手博物館の団体会員加入
 12/ 5 会費未納者への請求書の送付
 12/21 個人会員(長川清悦氏)の退会
 12/21 平成18年度道南ブロック博物館施設等連絡
 協議会交付金の助成
 12/21 平成18年度道北地区博物館施設等連絡協
 議会交付金の助成
 12/21 平成18年度日胆地区博物館施設等連絡協議
 会交付金の助成
 12/22 団体会員(利尻島郷土資料館)の退会

平成19年(2007)

- 1/ 4 団体会員(せたな町立大成郷土館)の退会
 2/20 平成19年度北海道博物館表彰候補関係書
 類を担当役員に送付
 3/ 6 団体会員(阿寒国際ツルセンター)の退会
 3/ 9 平成18年度(財)北海道博物館協会支部助
 成金の申請
 3/23 平成18年度第3回役員会を開催
 (札幌市・KKR札幌)